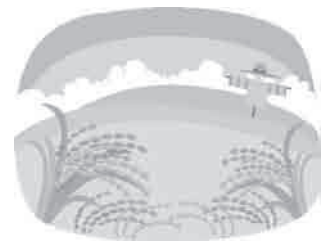


しまなみ農業だより

たまみの夏季 以降の管理



このページで触れなければならないのに、なかなか手がつけられなかった課題があります。上島町で特産品化すべく取り組んでいるカンキツ新品種「たまみ」です。苗木スタートのため品質が一定せず、そのくせ定植2年目から成ろうとして樹勢を低下させるという厄介な性質がありました。他の新品種の過去の経験から、苗木スタートのカンキツ樹の品質が安定するには結実して3〜4期ほどかかり、その間の果実をどうするのか、という大問題があります。過去には出荷果実が品質不良で返品されてしまったり、気象条件もあって枯死してしまう樹も出てしまいましたが、ようやく昨年あたりから品質が安定してくる兆しが見え始めました。今号ではこれまでの苦い経験を踏まえつつ、今夏しなければいけないことを解説します。

8月〜9月はしっかりとかん水

たまみは夏季早魃に遭うと小玉果の多発や樹勢低下が見られますが、昨年は夏〜秋季の降水量が多く、樹勢が回復した上に糖度も2月上旬で出荷果実全体の平均が13度でした。このことは夏季多雨でも糖度が上がるので、8月〜9月はしっかりとかん水しなければいけないことを示しています。程度としては、一般的なポンカンに準じて、10日おきに30mmを目安に行うのがよいと思いますが、上島町ではそんなに多くかん水できない場合が多いと

思います。梅雨が明けたらあまり日を置かず、地面に湿りが残っているうちにかん水を始めること、1回に3〜6mm程度でも良いので度々行うこと、株元を黒ボリマルチなどで覆い乾燥防止に努めることが肝要です。

果実の目標サイズと摘果のめやす

イヨカンやハッサクなど従来の中晩柑や温州みかんは、果実肥大のスタート時からそこその大きさがあり、早期摘果に取り組みやすいものです。しかし最近の清見を親に持つ新品種たちは、スタート時の果実が小さいものが多く、特にたまみはその傾向が強いようで、あら摘果時に迷います。とはいえ摘果が遅れますと樹体に負担をかけてしまいますので、早めに行わなくてはなりません。7月早々に、まずは絶対に着果させないポイント・樹の主枝先端付近と膝より下、極端な内成り果は落としてしまいます。その後は順次小玉果を落としていきます。8月上旬から1カ月おきのS果の推定下限値を表1に示したので参考にしてください。摘果の目安として葉果比がよく用いられますが、たまみは葉が小さいのであまり参考になりません。そのため9月中旬に樹容積1㎡あたり60果を目標にしてください。樹容積はカンキツの場合、樹冠の(長径×短径×樹高)×0.7で算出され、樹冠横径が1mで樹高1.4mまたは樹冠横径1.2mで樹高1mだと樹容積がちょうど1㎡になります。写真1のようにぐっすり成っていれば1㎡あたり80果、逆に写真2のようにあまりなっていないようだと40果で、80果だと樹勢が低下し、40果では果実が粗皮になり品質が良くありません。60果に調整すると、90%以上がM・L果となり、翌年も着花が見られました。あまり着果していない樹では、低品質果を生産するくらいならいっそのこと全摘果して、今年は樹冠の拡大を図るのもよいと思います。

収穫時期は8月〜9月の降水量で決まる

直近の2期は冬季に甚だしい寒波が襲い、越冬

中晩柑に多大な被害をもたらしました。こうした気象が続きますと、つい早めに収穫してしまいたくなるものです。しかしたまみの場合、酸高果を貯蔵して減酸を待つ、ということをしてはいけません。貯蔵限界は約4週間、この間に流通・消費を終えねばなりませんので、家庭内貯蔵が許されるのはせいぜい2週間まで。さつさと出荷しなければいけません。幸いたまみは、夏季湿潤で他のカンキツが低糖度で困っているときでも糖度が上昇し、減酸が進むことがわかりましたので、夏季の降水量で当季の品質が予想され、収穫期の予定が立つことがわかりました。実際の集荷予定は後ほどJA等からお知らせがあると思いますので、たまみ生産者の皆様におかれましては、この暑い夏季、特に念入りにかん水していただくようお願いいたします。

表1 時期別の小玉果除去の目標果実横径 (mm)

8月10日	9月10日	10月10日
23	33	46

これにより大きい果実はS階級以上になると予想される



写真2 樹容積1㎡当たり80果

大玉・粗皮で浮皮気味。ス上がりしやすい。



写真1 樹容積1㎡当たり40果

ぐっすり結実して着果負担が大きい